©日本記者クラブ 2021

日本記者クラブ会報

公益社団法人　日本記者クラブ　〒100－0011　東京都千代田区内幸町2－2－1　日本プレスセンタービル　TEL. 03－3503－2722　https://www.jnpc.or.jp/



撮影：樋口　慧（日本経済新聞社写真映像グループ）

賛否の風受け、聖火走る

東京五輪の聖火リレーが、3月25日、福島県からスタートした。原発事故の影響で町域の約95%が帰還困難区域で居住者がいない双葉町。損壊した建物が残る同町を走る聖火ランナー

「宣言解除」、記者あり会見再開「オンラインにライブ感」が課題

「いつまで続くのか」

この一文は、ちょうど1年前の会報4月号のこのページで、長引くコロナ禍を嘆いた最終行だ。当時は、まさか1年後に同じ嘆きをつぶやいているとは思わなかった。

この1年、時間が直進せず、同じ場所をぐるぐる回っている感じがする。関東1都3県は3月21日で緊急事態宣言が解除され、クラブの会見場に記者が戻ったが、これも昨年の繰り返しだ。

この状況から抜け出す「希望の星」がワクチン接種だ。3月24日には、世界で一番ワクチン接種が進んでいるイスラエルのコロナ対策責任者が現地からのオンライン会見に応じてくれた。100人を超える事前登録者リストには医療記者だけでなく、現地の各社中東特派員も含まれていた。

このように、ゲストも記者も遠距離参加の会見が増え、その「便利さ」も浸透してきた。これは1年前に比べれば大きな違いだ。そうか。コロナ禍に対応するため、それなりの変化は起きているというわけだ。

クラブでは今、会場とオンラインの二刀流方式で会見を運営している。便利さが強みのオンライン会見に、リアル会見のライブ感をどうやって盛り込めるかが新年度の課題だ。

嘆いても始まらない。前向きの変化をめざし、コロナとの長期戦にのぞみたい。

（専務理事　土生修一）

コロナ禍で異例の赤字予算

事業収益は約3700万円減

日本記者クラブの2021年度予算と事業計画が3月26日に開かれた臨時社員総会で承認された。

新年度予算の経常収益（収入）は3億2981万3000円、経常費用（支出）は3億8724万5850円、支出が収入を5743万2850円も超過する異例の「赤字予算」となった。

これは、コロナ禍が収束するめどがつかず、新年度も貸室利用料やレストラン「アラスカ」からの飲食売り上げ割戻金などの事業収益が前年度に引き続き通年より大きく落ち込むことが予想されるためだ。

事業収益の算出にあたっては、コロナ禍の影響が一定程度緩和された2020年11月の実績を基にした。ちなみに、昨年11月の実績はコロナ禍前の19年11月比で60％だった。

この結果、事業収益全体では、前年より3681万9000円のマイナスとなっている。収益全体に占める割合も、前年度より8・84ポイント減の8・46％となった。

受取会費は従来通り、2月1日現在の会員現勢に基づき計上したが、法人賛助会員退会などで前年度に比べて735万8400円減少した。

経常費用では、全体の半分近くを占める借室維持費に大きな変更はなく、人件費は、事務局長、一部職員の交代時期にあたり一時的に人員増になることもあり、費用全体における比率が前年度比で約4ポイント増加している。＊17ページに正味財産増減予算書掲載

通信不調で会見開始に遅れ
ゲスト、司会の奮闘で無事終了

オンライン会見開始から1年となるが、パレスチナのナビル・シャアス外交顧問の会見（3・17）ではこれまでで一番、冷や汗をかいた。

会見前日のパレスチナとの通信テストは順調だった。しかし当日、回線状態が悪く、開始予定時刻を過ぎても現地から映像も音も届かない。事務局は「中止やむなし」に傾きかけたが、司会の出川展恒企画委員（NHK解説委員）の判断で、もう一人のゲストである駐日パレスチナ代表部のワリード・シアム大使のスピーチで時間を稼ぐことに。この間、シャアス氏から「I will try again」の携帯メールが事務局に届き、大使も携帯電話でシャアス氏宅へ人を派遣する指示を出すなど奮闘。その甲斐あってシャアス氏が画面に登場し45分遅れで会見が始まった。その後、短時間の中断はあったが、質疑応答も含め会見は無事終了した。

辛抱強く待っていただいた会員の皆さんと、大使と英語で交渉しながら冷静に対応していただいた出川さんに感謝したい。会見後、出川さんは「アラブはいろいろありますからね」と中東取材歴30年らしい大人の感想。会見動画にも苦闘の痕跡が残っています。ショクラン！（土生）

新事務局長に江木慎吾氏

4月1日付で、前朝日新聞東京本社記事審査室長の江木慎吾氏が日本記者クラブ事務局長に就任した。これに先立ち、3月5日の理事会で、江木氏を新事務局長とする人事案件が承認された。

江木氏は1985年に朝日新聞入社。静岡支局、社会部を経て、ナイロビ支局、ニューヨーク支局で特派員として勤務。今年3月、朝日新聞を退職した。

目次

▼クラブゲスト 福井健策 弁護士、伊東敦 集英社編集総務部部長代理／三浦まり 上智大学教授／遠藤隆「たゆたえども沈まず」監督・テレビ岩手シニア報道主幹、小森はるか「空に聞く」監督、島田隆一「春を告げる町」監督、尹美亜「陽来復」監督／梅屋真一郎 野村総合研究所未来創発センター制度戦略研究室長、武田佳奈 同センター未来価値研究室上級コンサルタント／ナビル・シャアス パレスチナ自治政府議長外交顧問／前田健太郎 東京大学大学院准教授 3
▼会見リポート 一力遼 囲碁三冠／グレン・S・フクシマ 米国先端政策研究所上席研究員／細野豪志 衆議院議員／武田真一 宮城教育大学特任教授／ミハイル・ガルージン 駐日ロシア大使／香取照幸 上智大学総合人間科学部教授／伊藤公雄 京都産業大学教授／ラン・バリツェル イスラエル・コロナ対策専門家チーム代表 4〜7
▼ワーキングプレス 総務省接待問題 共同通信社 津川康一 ミャンマー情勢 ANN（テレビ朝日） 白川昌見 8・9
▼新・列島報告 千葉県 千葉日報社 伊澤敏和 10
▼被災・防災・減災 最前線 栃木県足利市、山火事 朝日新聞社 根岸敦生 11
▼東電福島第一原発取材団 12
▼リレーエッセー 元自民党参院会長・青木幹雄さん 朝日新聞社 南彰 13
▼書いた話書かなかった話 リー・クアンユー氏にみる指導者像 小池洋次 14・15
▼会議報告／21年度予算 16・17
▼記者ゼミ 18
▼マイBOOKマイPR 20
▼写真回廊 22

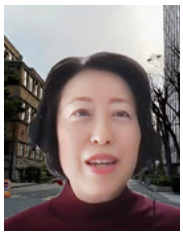
福井　健策　弁護士（左）
伊東　敦　一般社団法人ABJ広報部会長、集英社編集総務部部長代理（右）




現在、約700の海賊版サイトが活動し、上位10サイトの総アクセス数は月間２億以上。集英社では多い月で12万件の削除要請を実施。「悪質な運営者のほとんどが海外で、摘発が難しい。相手国政府や海外のインターネットコミュニティーの協力が必要」と訴えた。

■２・26（金）「オンライン海賊版の猛威 ― 改正著作権法施行と国際的な課題」／司会：土生修一専務理事／出席：53人

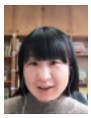
三浦　まり　上智大学教授（オンライン登壇）



「日本ではクオータ制（女性の議席や候補者の最低割合を定める措置）が未導入で、女性議員比率は衆院で9.9％と低い」「この制度は、性別均等のための手段であり、約130カ国が導入済み。女性議員が増えれば政治の意思決定にまで多様性が生まれる」

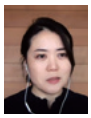
■３・４（木）「ジェンダーと政治」①／司会：伊藤雅之委員／出席：54人

被災地ドキュメンタリー監督座談会（オンライン登壇）

遠藤　隆（上左）　「たゆたえども沈まず」監督、テレビ岩手シニア報道主幹

小森　はるか（上右）　「空に聞く」監督

島田　隆一（下左）　「春を告げる町」監督

尹　美亜（下右）　「一陽来復 Life Goes On」監督

1850時間の映像を基に津波の凄まじさを伝えた遠藤さん、震災から１年後、岩手県陸前高田市に移住し撮影した小森さん、福島県広野町で原発事故の影響や復興の現状を記録した島田さん、東北３県で被災者の日常を追った尹さん。４監督が被災地への思いを語った。

■３・５（金）「3.11から10年」／司会：福田裕昭委員／出席：48人

梅屋　真一郎　野村総合研究所未来創発センター制度戦略研究室長
武田　佳奈　同センター未来価値研究室上級コンサルタント




パート・アルバイトでシフトが５割以上減少し、かつ休業手当を受けていない「実質的失業者」は女性103万人、男性43万人と推計。「依然として公的支援の情報が当事者に届いてない。通信アプリ『LINE』や自治体の広報誌を活用し、プッシュ型で支援すべき」と提案。

■３・９（火）「なぜ＜実質的失業者＞に支援の手が届かないのか」／司会：竹田忠委員／出席：55人

下記のゲストの会見リポートは
４～７ページに掲載しています。
※会見は全てオンラインのみで開催

一力　遼　囲碁二冠、河北新報社記者

■３・１（月）記者会見／司会：川上高志委員、代表質問：森本孝高（新聞三社連合）／出席：50人

グレン・S・フクシマ　米国先端政策研究所上席研究員（オンライン登壇）

■３・３（水）「バイデンのアメリカ」②／司会：杉田弘毅委員／出席：84人

細野　豪志　衆議院議員（オンライン登壇）

■３・４（木）「3.11から10年」／司会：瀬口晴義委員／出席：56人

武田　真一　宮城教育大学特任教授、「311いのちを守る教育研修機構」統括プロデューサー、「3.11メモリアルネットワーク」共同代表

■３・８（月）「3.11から10年」／司会：福田裕昭委員／出席：45人

ミハイル・ガルージン　駐日ロシア大使

■３・10（水）記者会見／司会：西村陽一委員長／出席：65人

香取　照幸　上智大学総合人間科学部教授、一般社団法人未来研究所臥龍代表理事

■３・15（月）「2040年の社会保障の姿を考える」／司会：小林伸年委員／出席：106人

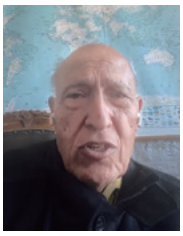
伊藤　公雄　京都産業大学教授（オンライン登壇）

■３・19（金）「ジェンダーと政治」②／司会：磯崎由美委員／出席：44人

ラン・バリツェル　イスラエル・コロナ対策専門家チーム代表（オンライン登壇）

■３・24（水）「新型コロナウイルス」⑰／司会：内城喜貴委員／通訳：池田薫、宇尾眞理子／出席：87人

ナビル・シャアス　パレスチナ自治政府議長外交顧問、元外相（オンライン登壇）



「バイデン政権とはすでに非公式接触があり、新政権からの具体的政策を待っている」と米新政権に期待を表明。「今年予定の評議会（議会）選挙で挙国一致政府を実現し、和平交渉を進捗させたい」と述べ、ファタハとハマスとの内部対立解消に意欲を示した。

■３・17（水）記者会見／司会：出川展恒委員／通訳：池田薫／出席：62人

前田　健太郎　東京大学大学院准教授（オンライン登壇）



「有権者の半数は女性だが国会議員の多くは男性。女性視点が反映されにくく、男性が設定した争点を議論するのが日本の特徴。これを民主主義と呼ぶのは不思議。メディアにおいてもジェンダーギャップを意識することが日本の民主主義の将来を考える上で重要」

■３・22（月）「ジェンダーと政治」③／司会：小栗泉委員／出席：56人

一力 遼

囲碁二冠
河北新報社記者

3月1日

「自粛で囲碁と向き合えた」

囲碁の七大タイトルである碁聖、天元を昨年獲得した一力遼二冠(23)。二冠を獲得できたことについて「大学卒業後、(コロナ禍による)4、5月の自粛期間中に囲碁と向き合うことができ、タイトル獲得につながった」と述べた。

一力二冠は昨春に早稲田大を卒業、河北新報社に入社した。囲碁棋士と新聞記者という「二足のわらじ」を履いている。

実は、一力二冠は昨年8月の碁聖獲得まで井山裕太三冠(31)に七大タイトル戦の挑戦手合で5連敗していた。

「学生の時は試験と対局が重なり、日程調整に難しい点があった」と吐露。そうした時間的な制約からの解放が好結果につながったようだ。



井山三冠から天元を奪取できた理由について、「以前は序盤から仕掛けたが、それを見直したのがいい結果につながった」とも。会見に同席した師匠の宋光復九段も「序盤でじっと構えるなど今までに無く幅が広がり、結果に結び付いた」と弟子の成長を喜んだ。

一力二冠とともに「令和三羽がらす」と呼ばれる芝野虎丸二冠(21)、許家元八段(23)というライバルの活躍に衝撃を受け、「自分もさらに努力しなければならないと思った」。

国際棋戦で日本人棋士がなかなか勝てない。その現状について「中国と韓国のトップ棋士についていくのは大変。彼らの強みは時間に対する考え方。早く考えるのが勝つポイント。私も(時間の使い方を)モデルチェンジしてさらに精進して臨みたい」と述べた。

新聞記者としては現在、囲碁コラムを執筆中。「囲碁の魅力を伝えられるよう頑張っていきたい」と抱負を示した。

人工知能(AI)について、一力二冠は①序盤、特に流行しているスタイルの研究②自分が打った碁の検討―に活用している。AIは人間をはるかに超えている。「どう(人間とAIが)共存するか。(われわれは)AIの良い部分を吸収することが大事だ」と締めくくった。

共同通信社囲碁・将棋チーム編集長　渡部　道雄

「バイデンのアメリカ」② グレン・S・フクシマ

米国先端政策研究所上席研究員

3月3日

中間選挙までの実績がカギ

民主党の政策に数々の助言を行ってきたフクシマ氏からみても、分断の修復を掲げてスタートしたバイデン大統領の道のりは平たんではなさそうだ。フクシマ氏はまずバイデン政権発足について「ワシントンが正常に戻った」と評価しながらも、上院で民主共和両党の勢力が拮抗していることから、バイデン大統領が実際に自ら主張する政策をどこまで実行できるか不透明との見方を示した。



バイデン政権の政策課題についてフクシマ氏は、①コロナ対策②経済回復③格差是正④気候変動⑤外交―の5点を挙げた上で、特に外交の軸は中産階級にプラスになる政策と指摘した。背景にはかつて支持者だった労働組合、低所得層が離れていることへの危機感があり、海外に雇用を奪われているという批判が根強い以上、各国との貿易協定に直ちに入るのは難しいとの見方を示した。

またEUが米国に対し気候変動など具体的な項目を挙げて関係強化を働きかけていることを踏まえ、経済・安全保障両面で期待が高い日本も、今こそ米国に対し積極的な提案を行い、同盟関係を強化すべきと提言した。

今後の政治情勢については、共和党は、現時点ではトランプ氏が次の大統領選挙に立候補する可能性が高いが、実際に立候補するかは、トランプ氏を対象に頻発するとみられる訴訟の行方と共和党内の反トランプ勢力の影響力がどうなるかによると語った。

一方、民主党は、中道のバイデン大統領が左派の要求も受け入れて党内融和に努めているが、今後左派から過激な要求が高まる可能性があり、来秋の中間選挙までに具体的な実績を残せるかがカギになると分析、中間選挙で共和党が上院過半数をとれば、後半の政権運営は一気に難しくなると予測した。さらにフクシマ氏は、海外からのテロより、むしろ国内の不満分子によるテロへの警戒感が強まっていると指摘した。

米国社会の複雑な分断に加え、武装勢力の議会襲撃計画も伝えられる中、多極化する国際情勢の行方を見る上で、米国の政治状況を治安面とともに注視していく必要があるだろう。

NHK解説委員長　今村　啓一

「3・11から10年」

細野　豪志　衆議院議員

3月4日

「政府は処理水の放出決断を」



福島の復興は原発事故の影響で、他の被災地より遅れていると指摘される。細野氏は、その一因として自身が関わった「除染の長期目標」への反省を口にした。原発敷地内で保管されている「処理水」や、除染土、甲状腺がん検査など福島に残る課題を具体的に指摘し、解決に向けた持論を展開した。

特に時間を割いたのは汚染水を浄化した処理水の問題。政府は希釈して海に放出することを検討しているが、反対意見や漁業への風評被害の懸念があり、結論は出ていない。

細野氏は事故時に汚染水を漏出させた記憶が残り、反対の声などにつながっていると指摘。海外でも海洋放出している事実を挙げ「福島の処理水にだけ反対するのは偏見。政府が早急に放出を決断することが、福島の復興にも重要だ」と強く訴えた。

自らが関わった「追加被ばく線量を年間1ミリシーベルト以下にする」という除染目標については「健康や安全の基準だと誤解された」と苦々しく語った。住民帰還や復興の遅れを招く懸念が当初からあったとし「健康の基準ではないと、もっと説明できなかったか。今も検証されるべきものだ」と率直に述べた。

質疑では、今後の原発利用への見解に関心が集まった。細野氏は「今の時点で最も重要なのは温暖化対策だ」と主張。「安全性が確認された原発の再稼働は必要。原発という選択肢を排除すべきではない」と現政権と同様の見解を示した。

原発事故と、新型コロナウイルス対策の共通点を指摘したことも興味深かった。自らの経験から、政府とともに危機に対処する専門家の資質として「虚栄心がない」「重要な判断から逃げない」「行政組織と関わった経験がある」という条件を示した。その上で「限られた情報の中で、その段階で分かることをきちんと判断する。そういう科学者を育成しなければいけない」と語った。

共同通信社科学部・原子力報道室　竹内　知史

「3・11から10年」

武田　真一　宮城教育大学特任教授

3月8日

災害前こそメディアは備えを



未曽有の大災害時に河北新報の報道部長として取材の指揮を執り、その後も被災地の移り変わりを見続けている人だけに、一つ一つの言葉が重く響いた。

震災時、サーバーが横倒しになり新聞製作が不可能になった河北新報は、災害時の支援協定を結んでいた新潟日報を頼り、翌12日付朝刊を発行し多くの読者に届けている。ただ、これは当たり前の結果ではない。2010年3月に「保険の保険の位置付け」（武田氏）で協定を結んだのが新潟日報。震災1カ月前の11年2月には両社が担当者を派遣し合い、紙面のテスト製作をしていたことが発行継続につながった。同様に協定を締結していた東北の3新聞社は被災して協力を仰げる状況ではなかった。武田氏は「偶然や奇跡的な要素はあったにせよ、全ては備えの延長だった」と振り返る。

宮城県は定期的に大地震に見舞われる地域で河北新報は従来、防災報道に多くの紙面を割いていた。ところが、震災半年後に実施した読者アンケートで4分の3が「河北の報道は役に立たなかった」と答えている。そこで始めたのが、少人数の住民を集めて直接、防災の大切さを訴えかけるワークショップ「むすび塾」。地元と全国各地で開き先月、100回を迎えた。南海トラフ地震や首都直下地震で甚大な被害が想定される中、武田氏は「起きる前に考え、行動することがメディアには必要だろう」と強調した。

武田氏は2年前から宮城教育大の教員として被災地の現状を伝えるとともに、災害の伝承に力を注いでいる。コロナ禍で来訪者が激減し「この1年が次の10年につながる正念場と位置づけていただけに残念な状況」と受け止める。メディアには「『記念日報道』で、10年を過ぎると震災報道が下火になるのではと心配している。節目にせず持続的に発信してほしい」と注文を付けた。

東京新聞特別報道部　上田　千秋

ミハイル・ガルージン

駐日ロシア大使

国境協議、核心避け淡々と

3月10日



ロシアのミハイル・ガルージン駐日大使が日本記者クラブの会見に臨んだ。過去の首脳会談で通訳も務めてきた外交官だけに、流ちょうな日本語を操り、1時間の会見を軽くこなした印象が強い。

最も注目されたのは昨年7月に発効されたロシアの改正憲法で、自国領の割譲を認めない原則を明記しながらも、近隣国との国境画定や線引きの話し合いを例外規定として設けている点だ。この関係では、プーチン大統領が2月に「ロシアの法律に反する行為は一切やらない」と発言していた。日本との国境画定協議は例外規定に当たるのか。この点を問われたガルージン氏だが「憲法解釈をする立場にない人間だ」との回答にとどめた。

一方でロシアが望む平和条約のあり方については「戦争直後に締結されるタイプの文書ではないはずだ」「平和、善隣、友好、パートナーシップの形を取るべきだ」と主張。「その後に、お互いに関心を持つ問題の議論が可能だと思う」とも語った。これがどのような意味なのかを問いただす質問も出ず、大使自身も話さなかった。これまでのロシアの主張を踏まえれば、何らかの形で条約を結んだ後ならば、国境画定協議に臨めるとの立場を示唆したとも受け取れるが、これは受け手の推測にとどまっている。

もう一点関心を集めたのはロシアが開発に成功した新型コロナウイルスのワクチン「スプートニクV」の存在だ。ロシアはワクチン提供を材料にして、国際社会で影響力の拡大に努めているとも言われ始めたのだが、ガルージン氏は「ワクチン外交との表現は使わない」と反論してみせた。この先に日本がロシア産ワクチンを認可する見通しを問われても「日本政府が肯定的な態度を取ることを期待する」と答えるのみ。こちらも踏み込まず、外交官らしい回答に徹した形だ。

毎日新聞社外信部　大前　仁

香取　照幸

上智大学総合人間科学部教授

「2040年の社会保障の姿を考える」

社会保障は自己実現を後押し

3月15日



厚生労働省の官僚として介護保険制度をはじめさまざまな社会保障制度づくりを担った香取氏の指摘は、難解な制度をどう理解すればいいのか示唆に富んだ。

年金、医療、介護、子育て支援、雇用など個々の制度を理解するためには、まず「社会保障とは何か」という定義の共有が大切だ。その説明は明快だった。

個々人が自己実現でき能力を発揮することで社会に活力が生まれ社会が発展する。社会保障はその時に生まれるさまざまなリスクをヘッジし社会の安定を支えるためのもの。

言い換えると、セーフティーネットは人が落ちた時の安全網というだけではなく、落ちることへの不安を取り除き「思い切って飛ぶため」に不可欠なシステムだと説明した。

思い切って飛べれば社会に活力が生まれ経済にも好影響がある。

その意味で、社会保障政策と経済政策の課題は「表裏一体」との指摘にうなずいた。

ところが今、社会保障は「機能不全を起こし格差や貧困が拡大している」と言う。それは社会の支え手である中間層を崩壊させている。格差・貧困の拡大は社会の分断と社会不安を増大させ、支え合いである社会保障の機能を低下させ、それがさらに格差を広げる。経済成長にも悪い影響を与える。この循環に陥っていると指摘する。

格差・貧困の解消へ「一番目に見える課題は非正規労働者の問題」と指摘した。社会保障政策では既にこの問題は認識されている。香取氏も公的年金制度を例に非正規雇用への適用拡大の必要性を説いた。

雇用政策と連携した社会保障政策の必要性も力説した。「非正規は安定的な雇用が確保されてなく職業訓練の機会もなく、能力を生かし切れていない」との指摘は的を射ていた。社会保障を機能させるための課題をあらためて認識した。

東京新聞論説委員　鈴木　穣

「ジェンダーと政治」②

伊藤　公雄

京都産業大学教授

3月19日

男性に「下駄脱がされる」恐怖



これまでジェンダー平等については女性の視点から発信されることが主だったが、今回は「男性学」の視点ということが最大のポイント。

日本の現状は、ジェンダーギャップ指数が153カ国中121位など大幅に遅れていることは広く報道されている。しかしこれまで国や社会がその対策に本腰を入れていたとは言い難い。伊藤氏はその背景に「1970～80年代に男性の長時間労働と女性の家事育児等の仕組みで達成された成功体験」があり、それによって生まれた「企業、官僚、政治組織という社会の広い分野における男性主導のボーイズクラブ主義」が変化を阻んできたと解説する。

しかしジェンダー平等が世界的潮流となるにしたがって、男性には今まで履かせてもらっていた下駄を脱がされるという恐れが生まれつつあるという。伊藤氏はこの現象を「剥奪の男性化」と名付け、社会的マジョリティーの立場を剥奪されると感じる男性へのケアの必要性も説く。

男性の意識変革はジェンダー平等にとって不可欠である。伊藤氏は男性が「気づき→ジェンダー平等の認識を深める→家事・育児・介護などを体験→さらなる気づきを得る」というサイクルを体験することを「政策的」に推し進める必要性を訴える。

女性登用が「アリバイ作り」などと陰で揶揄されるような女性活躍政策の一方で、男性が実体験を積める環境も整えられてこなかった。女性蔑視発言を海外から厳しく指摘された今年2月までジェンダー問題をおざなりにしてきた政財界の責任は重い。

最後に伊藤氏は剥奪感を乗り越える術として「無自覚に背負い込んでいる男性という鎧を脱ぐと楽になる」と語った。ジェンダー不平等のあおりを受ける男性も少なからずいる。性別にかかわらず自分らしくいられるという理想を絵に描いた餅に終わらせないためにも、今訪れている変化の波を逃してはならない。

毎日放送東京支社報道部次長

石田　敦子

「新型コロナウイルス」㊼

ラン・バリツェル

イスラエル・コロナ対策専門家チーム代表

3月24日

大規模接種でワクチン効果確認



イスラエルの新型コロナウイルスのワクチン接種は驚くべき速さで進んでいる。50歳以上の国民の約8割に対し、2回目の接種を終えたという。使っているのは米ファイザーとドイツのビオンテックが開発したRNAワクチンだ。発症を抑える効果は94％、重症化予防の有効性は92％に達することを確かめた。

これらの数字はワクチン接種を受けた約60万人を、それぞれ年齢や宗派が同じで接種を受けていない60万人と比べてはじき出した。他に例をみない、実データを使った詳細な比較の結果であり説得力がある。

一人の感染者が生み出す新たな感染者数を示す実効再生産数は約0.6と1を大きく下回り、感染は確実に減っているという。

RNAワクチンは従来とは異なる先端技術を使っているだけに、当初は効果や安全性に懐疑的な見方もあったが、イスラエルのデータによって、それはかなり払拭された。これからワクチン接種を本格化する日本にとっても、安心材料となる。

ロックダウンを解除する際に「出口戦略」として導入した「グリーン・バッジ」と呼ばれるスマートフォン向けのワクチン接種証明アプリも興味深い。証明がある人については行動制限を緩め、感染リスクの高いところにでも入れるようにした。たとえば、ある程度混み合ったレストランや劇場に行くことができる。

日本だと若者の行動範囲が広がるのを想像するが、イスラエルでは「高齢者が社会との接点を取り戻し、心身両面の健康を改善できる」（バリツェル氏）効果を狙っている。寝たきりの高齢者が減り、消費行動も刺激されて、医療費の抑制と経済回復の両方につながる好循環を期待しているようだ。

国の大きさ、人口、社会構造などが違い、イスラエルの実情を単純に日本とは比較できない。パレスチナの人々への接種が後回しにされたなど人道的な問題もある。だが、すぐに使える国産ワクチンがなくても戦略的に素早く動くことで、ここまで対策を進めた経験は大いに参考になる。

日本経済新聞社編集委員兼論説委員

安藤　淳

総務省接待問題

同情論が音声公開で空気一変
次官候補辞職など事態混迷

津川　康一（共同通信社地域報道部総務省キャップ）

総務省の接待問題は、底なしの様相をみせている。

菅義偉首相の長男が勤める放送事業会社「東北新社」による接待では、今夏の人事で事務次官就任が有力視されていた谷脇康彦総務審議官（当時）ら11人が処分されたが、その後、NTTによる幹部への接待も発覚。両社の接待に応じた谷脇氏は霞が関を去った。

NTTによる接待疑惑は、総務省の政務三役経験者にも広がり、放送や通信行政に及ぼした影響への疑念は深まるばかりだ。総務省は第三者委員会で徹底して調査する方針を示すが、どこまで核心に踏み込めるかは見通せない。

「ご子息に誘われたら仕方ない」

「ちょっと脇が甘かった」「首相のご子息に誘われたら仕方ない」

週刊文春が東北新社による接待疑惑を報じた2月上旬、省内を取材していると、谷脇氏らへの同情論を数多く耳にした。事務方ナンバー2を巻き込んだ一大スキャンダルにもかかわらず、どこか切迫感に欠け、中には「関係者の処分で世間に厳しい姿勢を示しつつ、谷脇氏らのキャリアに影響が出ないようにすることが最大の課題だ」と話す幹部さえいた。

そういった空気感が伝わったのか、国会では秋本芳徳情報流通行政局長（当時）は接待時の会話内容について「記憶にない」とかわし続け、武田良太総務相は調査中にもかかわらず「放送行政がゆがめられたということは全くない」と言明。首相も「（長男は）完全に別人格」と自身との切り離しに躍起になるなど、首をかしげるような言動が目立った。


参院予算委で答弁する谷脇康彦氏（3月10日／共同通信社提供）

空気が一変したのは、秋本氏が東北新社から接待を受けた際、衛星放送に関するやり取りをしていたとする音声の公開だ。秋本氏が自身のものと認め、接待への疑念が一気に深まった。同時期、谷脇、秋本両氏らへの接待が複数回に及んでいたことも判明。首相や武田氏が守勢に回る場面も次第に増えた。

危機感を抱いた官邸は、事態収拾に向け、早急に調査をまとめるよう総務省に指示。発覚から約3週間後の2月24日、総務省は11人の処分を発表し、谷脇氏に最も重い減給10分の2（3カ月）の懲戒処分を科した。同時に「ほかの事業者からの接待はなかった」と結論づけ、幕引きを印象づけようとした。しかし、東北新社による接待が多かった理由を問われた武田氏が「直接的な原因は正直言ってわからない」と答えるなど、調査が不十分なことは誰の目にも明らかで、省内からも「他事業者からの接待が発覚すれば、総務省はもたない」との声が出ていた。

処分後にNTTの接待発覚

予感は的中する。処分から約1週間後の3月3日、NTTによる接待が発覚。総務省の調査に対する信頼性は失われた。2月の処分時は「来夏に次官昇格の芽はある」とされていた谷脇氏は更迭され、2度目の懲戒処分を受けて辞職。首相は、重要政策である携帯電話料金の引き下げで実務を担ってきた「腹心」を失った。

総務省は、放送・通信分野の課長級以上の職員ら144人を対象とする大規模調査を実施するほか、第三者の検証委員会が職員や政治家への聞き取りなどを通じ、衛星放送の許認可などに問題がなかったか確認する方針だ。しかし、武田氏もNTTと会食していたことが分かり、事態は混迷を深めている。総務省で接待が常態化していたのか、度重なる接待が政策に影響を及ぼしたのか。読者の疑問に答えるため、粘り強く取材を続けていきたい。

つがわ・こういち▼2005年入社　宇都宮　新潟両支局　名古屋支社編集部　政治部首相番を経て　14年から地域報道部　20年3月から現職

ミャンマー情勢

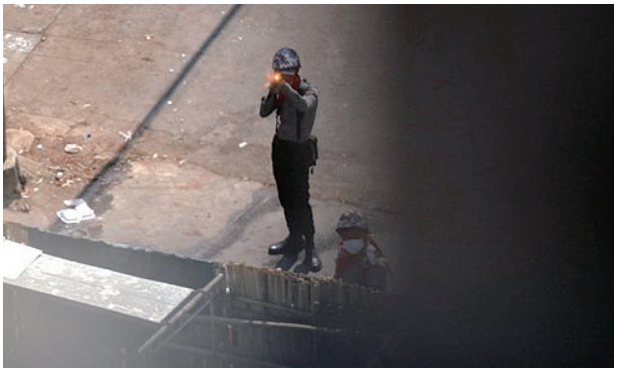
弾圧激化、覚悟の抗議と発信続く
遠隔取材に苦悩、メディア締めつけも

白川　昌見（ANNバンコク支局長）

2月1日早朝、タイ国内の出張のため車で空港に向かっている最中に一報が入った。「クーデターが起きて、スー・チーさんが連行されたという情報がある。急いで確認している」。ミャンマーの現地スタッフからの連絡だった。クーデターの噂は、数日前に浮上していたものの、国軍側が憲法を順守するという声明を出したことで、その可能性はなくなったというのが大方の見方だった。

「まさか！」と思いながらも、速報の原稿を東京に送る。そして、しばし逡巡する。「クーデター」という言葉は歴史としては学んできたが、自ら取材した経験はない。ただ、とんでもないことが再びミャンマーで起きてしまったという確信だけはあった。

「空港はやめて支局に行ってください」。私は出張の取りやめを決断し、ドライバーに行き先の変更を告げた。本来ならそのまま空港に向かい、ミャンマー行きのフライトに飛び乗るところだ。だが、元々コロナ禍でビザは取り消されており、ましてやクーデターで現地の空港は閉鎖、すぐの現地入りはかなわない。支局で情報収集を進め、その夜私はバンコクから中継でミャンマーの状況を伝えた。遠隔取材の始まりだった。



現地の取材協力者に向かって発砲する警官（3月8日／ヤンゴン／協力者提供）

真偽混在の地元メディア

自ら現地に入れないとなると、頼みの綱は現地のスタッフである。治安部隊の弾圧が激化する危険な状況の中、彼らはミャンマーの現状を世界に知ってもらいたいと必死に取材を続けてくれている。

とはいえ彼らも全ての情報を直接確認することは不可能で、地元メディアの引用という形もとらざるを得ない。しかし、その地元メディアも様々で、死者の数でさえ食い違う。

国軍側は国営放送を通じて、自分たちに都合のよい主張を公式情報として発信しているようにみえる。「選挙に不正があった」「死亡したデモ参加者に使われたのは警察の銃弾ではない」――。額面通りには受け取り難い情報ばかりだ。

一方、SNSでは一般市民が、現場からの映像や情報をどんどん発信している。第二の都市マンダレーで女子学生が頭を銃撃される瞬間の映像は、発生直後に一気に拡散した。その後も放送で使用できないショッキングなものも含め映像は次々と入ってくる。あらゆる情報は、真偽も含め、冷静な見極め作業を要するのだ。

こうした中、メディアの締めつけやインターネット規制も強められ、日本人記者の拘束事案も発生した。国軍側は「今回の政権奪取は憲法に則った措置だ」として、「クーデター」という表現を禁止する通達をメディアに出し、従わなかった5つの独立系メディアの免許をはく奪した。

取材協力者が発砲の標的に

ある日、協力者と連絡がとれなくなった。しばらくすると、「今警察が撃ってきたんです。近くの壁に当たったから大丈夫でした」と折り返しがあった。カメラには彼に向かって発砲する警官の姿が収められていた。避難を勧めたが、「事態が変わるまでは発信し続けたいんです。軍事政権を認めるわけにはいかないので」と。口調は明るいが、悲壮な覚悟が感じられた。

コロナ前、取材でミャンマーを訪れるたび、ロンジー姿でゆったりと歩く人々の穏やかな雰囲気に癒された。スー・チー氏のキーホルダーを笑顔で販売してくれたNLD（国民民主連盟）本部のスタッフは今、どうしているだろう。ミャンマーの人々を思い浮かべるたび、一刻も早い事態の収拾を願いつつ、自分に何ができるかを自問自答する日々が続いている。

しらかわ・まさみ▼2002年テレビ朝日入社　政治部で小泉政権末期から民主党政権　第二次安倍政権までを取材　平河クラブ　官邸クラブ　野党キャップなどを経て　18年7月から現職

新・列島報告54　千葉県
コロナ禍で異例の知事選

組織選挙に限界、SNS駆使

取材は現場重視の従来型

伊澤　敏和
（千葉日報社報道部長）

任期満了に伴う千葉県知事選は3月21日に投開票され、元千葉市長の熊谷俊人氏（43）が１４０万票超で初当選した。獲得した票は、同知事選で過去最多。自民党が推薦した元県議の関政幸氏（41）は約38万票に終わり、「１００万票以上の差」が付く衝撃の結果となった。最多８新人が立候補した上、県内初の千葉市長選とのダブル選挙になるなど異例ずくめの知事選。中でも各党・各陣営を悩ませたのは新型コロナウイルス禍での戦い方だった。

年明け早々に発令された緊急事態宣言は、延長、再延長され、選挙期間すべてが宣言下となり各党・各陣営には新たな戦い方が求められた。特徴的だったのは「従来型組織選挙の限界」と「ＳＮＳを駆使した戦術」の２つ。〝変わる選挙〟の半面、取材は現場に足を運び、見て聞いて感じる〝従来型〟が基本だった。

■「宣言」で動けず知名度の差響く

１月８日に始まった２度目の緊急事態宣言で、年明けから臨戦態勢に入る予定だった自民党県連の幹部は「党の支持団体回りができなくなる。知名度の差を埋められるか」と懸念を口にした。

千葉市長を３期12年務めた熊谷氏に対し、自民党県議３期10年の関氏は知名度不足が最大の弱点。同党は「自民推薦の候補」「知事選は与野党対決」と自民の看板を前面に押し出して臨んだが、緊急事態宣言に出鼻をくじかれた。

告示日の３月４日には、投開票日の21日まで宣言が再延長される見通しに。選挙後に同党県連幹部は「箱モノが思うように開けなかった。開催しても呼ぶ人数を極力抑えるので勢いにつながらない」と組織を生かし切れなかったと振り返っている。

コロナ禍での新たな戦術として各候補・陣営が導入したのはＳＮＳ。特に熊谷氏は、告示日の前日まで市長職を務めたこともあり選挙活動が制約され、それを補うように大学生ら若い世代や主婦層との「オンライン意見交換会」をこまめに開いた。

関陣営もＳＮＳを重視したものの「手応えがない」と支持の広がりを欠いた。自民県連幹部はコロナへの恨み節をもらしつつ「熊谷氏は過去最多の１４０万票を取っている。コロナで活動できなかったとは言い訳にならない」と完敗を認めた。

■討論会も一変、オンラインで

大型選挙の際に各種団体が企画・運営する「公開討論会」も様変わりした。



知事選で早々に「当確」となり、花束を受ける熊谷氏（3月21日／千葉市中央区のホテル／千葉日報社提供）

今回の知事選で、公開討論会は異なる主催者により３回開かれた。うち２回はオンラインによる「リモート討論会」で、候補者、主催者、視聴者がそれぞれ別の場所という形で開催。残る１回は候補者を一つの会場に集め、討論する様子をオンライン配信した。いずれもコロナ禍での工夫が見られた。

一方、取材する側は〝従来型〟が基本。選挙事務所に足を運び、陣営の動きや作戦、意気込みを見て聞いて感じ、候補者の街頭演説や個人演説会に出向いては訴えを直接聞き、聴衆の反応を探った。取材手法はすべて従来型だった。

報道の仕方には変化があり、自社サイトを活用した速報を重視。「ネット用」「紙面用」に書き分け、ニーズに応えるよう工夫した。さらに初の試みとして早稲田大学マニフェスト研究所と連携し、候補者アンケートを実施。ネットと紙面に掲載し、自社アンケートとは異なる切り口での選挙報道につながった。コロナ禍に限らず、進むネット社会へ報道にも対応が求められている。

いざわ・としかず▼１９９６年入社　政経部県政担当　国会担当　社会部長などを経て　２０２０年11月から現職

栃木県足利市の山火事

被災 防災 減災

最前線⑱

乾燥、強風で拡大、23日目に鎮火

「陸空共通地図」で消火連携

根岸　敦生（朝日新聞社足利支局長）

栃木県足利市と言えば、足利学校と足利氏ゆかりの鑁阿寺。中世以来の寺が並ぶ。市街地を見下ろす足利城跡の両崖山（標高251メートル）一帯が2月21日に出火した今回の山火事の現場となった。

この山は足尾山地の末端に位置し、市街地に近い。ハイキング路が整備され、東京からも近い。手近な里山ということで、年間に約190万人の登山客が訪れていた。

■枯葉に残った火種処理に難渋

晴れて穏やかな日曜日、2月21日午後3時42分、サイレンの低い音が4回鳴った。消防団を召集する合図だ。乾燥注意報発令下。23日間に及ぶ山火事の始まりだった。

米カリフォルニア州の山火事のように猛火が迫ってくるというより、足利は下草や枯れ葉がじわじわ燃え広がる火事だった。民家が山際まで建っている。火が消えたと思っても、風にあおられて再び広がる状況が続いた。

神奈川新聞の1年生記者で署回りをしていたころ、横浜・金沢署のベテラン刑事課長に「茅葺き屋根の火事は消火が難しい」と教えられたのを思い出した。山全体に積もった枯れ葉は、茅葺き屋根と同じで、表面の火は消えても、下に火種が残る。残火をどう消すかが難しかった。

加えて23、24日には最大瞬間風速17～18メートルの北西からの風が吹いた。地元では「赤城おろし」と呼ぶ強風で、自衛隊のヘリも飛べない時間があった。谷では風向が乱れ、風上向きへも火が広がった。





㊤両崖山の側で起きた火の手は南東側の斜面まで拡大（2月24日）㊦飛び火した火の手が白煙を上げた（2月25日／いずれも栃木県足利市／筆者撮影　朝日新聞社提供）

早い段階から、足利市は栃木県内や群馬県の両毛地域の消防本部から応援を得た。防災ヘリは関東近県はもちろん、宮城、福島、富山からも飛来。自衛隊も1回5トンの水を放水できるヘリが支援に入り、大きな力になった。地元の中学生は「家から見える炎は怖かった。消火活動に当たってくれている姿はとても頼もしかった」と振り返った。

火事の取材で役に立ったのは、紙の2万5千分の1地形図。場所を確認、拡大の掌握などに役立った。

消火に当たる各部隊でも「地図」がカギになった。当初、足利市消防本部が用意したハイキングマップを利用した100メートルグリッド（格子）の地図が使われた。次に市が用意した500メートル枠のものが、最後に2月26日に自衛隊が用意した500メートル枠の地図で認識が統一できた。地上の地図はメートル単位だが、航空図では距離は海里、高さはフィートが原則。空と陸上の円滑な連携と意思統一のために「グリッドマップ」の重要さを再確認した。

前任地の成田支局では空港周辺のグリッドマップを成田国際空港会社が用意していた。機体からの落下物や航空事故などに際して迅速に発生場所を掌握し、対応するためで、地元の警察や消防など関係機関に配布している。山火事や水害など広域で災害対応しなければならない場面が増えている中、市町村境や都道府県境を越え、用意があった方がいい。

■記者も予兆察知の感度必要

消防の用意も肝要だ。山林火災の消火に有効なヘリが飛行できない夜間（今回は「魔の13時間」と呼んだ）がある。ホースや高圧ポンプ、水嚢などの装備、冬の渇水期に備えての水利の確保など不可欠だ。

焼失面積約167ヘクタール、避難勧告305世帯、鎮火まで23日間かかった山火事ながら、住民にも人家にも被害がなかったのが何よりだった。

実は今年に入って現場となった両崖山などでボヤが起きていた。労災の経験則「ハインリッヒの法則」では「1回の重大事故の前には29回の軽微な事故がある」とされる。取材する側も大事の予兆とみる感度を持つことが必要だった。

ねぎし・あつお▼神奈川新聞社を経て1991年入社　スポーツ部　静岡・藤枝　高知・安芸　千葉・成田支局などを経て2020年4月から現職

東京電力福島第一原発取材団
タンク林立、廃炉の遅れ実感

事故から10年

東京電力福島第一原発事故から10年になる今年の日本記者クラブの取材団による現地取材は、新型コロナウイルスによる緊急事態宣言下で行われた。取材現場は第一原発のみ、2日間に分け、参加者を計10人に限るという異例の形となった。

原発敷地内は汚染されたがれきなどが撤去され、地面をモルタルで覆うなどした結果、現在は敷地の9割程度で防護服と全面マスクは不要となり、一般の作業服と防じんマスクで作業できるようになった。





㊤関係者から説明を受ける記者たち
㊦使用済み核燃料の搬出が終了した3号機

1、2号機燃料搬出、10年後ろ倒し

だが、廃炉に向けた作業は順調とは言えない。福島第一廃炉推進カンパニーの木元崇宏さんによると、2月に3号機（写真・上から2枚目）の原子炉建屋のプールに残っていた使用済み核燃料の搬出が終了した。だが、1、2号機には千体を超える燃料が残ったままだ。2号機からの取り出しのため、大型構造物を建屋の隣に建設、横の壁に開口部を作って取り出すという新たな手法で進められることになった。17年度中に開始としていた1、2号機からの搬出は、それぞれ27～28年度、24～26年度と、最大10年程度後ろ倒しになっている。

汚染が激しい原子炉周辺に地下水が流れ込んで発生する汚染水の問題では、流入前の地下水をくみ上げて海に流す「地下水バイパス」、建屋周囲の土壌を凍らせる「凍土遮水壁」などが一定の効果を示し、一時は1日約540㌧に上った発生量は約140㌧に減少している。

最大の課題は、多核種除去設備（ALPS）で処理した後の汚染水の処分だ。敷地内には保管する巨大なタンクが千基以上林立し、約124万㌧たまっている。北側の森林を伐採して新たな廃棄物保管施設の建設などを始めたこともあり、東電は、敷地にタンクを新設する余裕がなくなり、22年秋以降に計約137万㌧の容量が満杯になると予想している。



原発北側の雑木林を造成し、増え続ける雑固体廃棄物を焼却するための関連施設が新たに建設されていた

福島、宮城両県で震度6強を観測した2月13日の地震は、タンクのずれや1号機の炉内の水位低下などの影響をもたらし、地震国の原発が抱えるリスクを改めて思い起こさせた。事故から10年を経ても、第一原発の危機的な状況は続いている。

共同通信社編集委員　井田　徹治

■行程（参加＝10社10人）
▼3月5、6日　東京駅集合／東京電力福島第一原子力発電所構内取材／東京駅解散（5人ずつ同じ行程で2日に分けて行った）
原発構内代表撮影（3月5日）：渡辺幹夫・東京写真記者協会事務局長

◆

今回の取材団実施に際し、参加者は入構予定日前（5日以内）にPCR検査で陰性を確認する、公共交通機関は使わず貸し切りバスで東京―福島間を往復する、現地では関係者以外と接触しないなどの対策を取った。

私が会ったあの人

元自民党参院会長・青木幹雄さん
「言葉より空気」で国政の中心に

南　彰（朝日新聞社）

政治記者として駆け出しの頃は、首相のぶら下がり取材での丁々発止が日常だった。前回のリレーエッセーで毎日放送の奥田信幸さんが取り上げた橋下徹・大阪市長（当時）なども担当。「記者会見は、現代の政治とメディアの主戦場」と肝に銘じてきた。

その筆者が10年以上、「懇談」という伝統的な政治部の取材手法で接してきた政治家がいる。「参院のドン」と呼ばれた青木幹雄・元自民党参院会長だ。

■因縁の相手の番記者に

番記者になったのは2009年。東京・平河町の砂防会館にある事務所で、愛飲するたばこの「チェリー」をくゆらせる青木氏と向き合った。「ここで話したことは表に出さないでくださいね」が決まり文句だった。

青木氏との関係は、人生の岐路とも重なる。

島根県で計画されていた中海干拓事業の歴史を研究する大学生だった2000年。「止まらぬ大型公共事業」を巡り、竹下登元首相と対峙していた弁護士の錦織淳氏の選挙を手伝うことになった。

事前の情勢調査では拮抗していた。しかし、弟・竹下亘氏に代替わり。元首相も急逝という弔い合戦を指揮したのが、当時官房長官の青木氏だった。完膚なきまでに打ち砕かれた錦織氏は出雲から撤退し、筆者も新聞記者になった。



官房長官時代の青木幹雄氏（1999年10月／朝日新聞社提供）

■世襲批判の記事も不問

そんな因縁のある青木氏の番記者となったので、青木氏の去就が注目されていた2010年参院選に向けて、竹下、青木両氏を育んだ出雲の政治風土に迫る企画「探訪保守」を執筆することになった。出雲で暮らす人々の息吹を感じながら、政治家だけでなく、出雲大社や「日本一の山林王」と呼ばれた田部家への取材を積み上げた。

「青木氏は1月8日、年明け初めて出雲入りする。新年会に顔を出すが、出馬表明はせず、18日の県連で青木氏の公認申請を一方的に決め、青木氏が受け入れるという筋書きである。身内へ受け継がせる環境が整うまで、漁協組合長から一代でつかみ取った政治家という『家業』を簡単に手放すわけにはいかないのだ」

自らは去就や世襲を口にしない青木氏をこのように論じる大型原稿を載せた朝のことだ。

羽田空港で待ち受けていると、青木氏は「どうぞ、どうぞ。お茶でも飲んで行きなさい」といってラウンジに招き入れた。

しばらく歓談をしていると、後から入ってきた国会議員に「この人は出雲のことを取材していてね」と紹介し、こう付け加えた。

「きょうも何か書いとったわね」

すべて読んだ上で受け入れていたのである。

ラウンジにあった朝刊を開いたその国会議員の表情が凍り付くなか、青木氏は何事もないように楽しそうに話を続け、飛行機に乗り込んでいった。

この4カ月後、青木氏は「軽い脳梗塞」で入院。突如、表舞台から姿を消した。後を継いだ長男が参院選で大勝した。

言葉よりも空気で動かす。日本政治の中心で力を持ち続けた源泉だった。筆者もその磁場で泳がされていたのかもしれない。

参院選後、ほどなく復帰した青木氏のもとには、与野党の幹部が通い続けている。愛飲していたチェリーの銘柄は、いまはない。

（みなみ・あきら　政治部）

次号は小林基秀さん（北海道新聞社）にバトンが渡ります。

リー・クアンユーにみる指導者像
人を動かす言葉と知性

小池　洋次



こいけ・ひろつぐ
1950年和歌山県新宮市生まれ　74年横浜国立大学経済学部卒　日本経済新聞社に入り　シンガポール支局長　ワシントン支局長　国際部長　日経ヨーロッパ社長　論説副委員長などを経て　2009～19年関西学院大学教授　19年からグローバル・ポリシー研究センター代表　関西学院大学フェロー

ジャーナリズムの世界に身を置いて、多くの人々に出会い、さまざまな経験をしてきた。その中で一番刺激を受けた人物は誰かと聞かれれば、迷うことなくこの人を挙げるだろう。リー・クアンユーである。シンガポール建国の父であり、世界から「アジアのオピニオン・リーダー」「小さな国の偉大な指導者」などと称賛されてきた。

リーの言動に接し、この国の歴史や彼の歩みを調べるたびに、指導者とはどうあるべきか、その要件とは何かについて考えさせられ、多くの示唆や教訓を得たように思う。

◆特派員時代に5回インタビュー

筆者は1985年から4年間、日本経済新聞のシンガポール特派員として活動し、この間5回、リーにインタビューすることができた。その後も、東京やワシントン、そしてシンガポールで何度か話を聞いている。

シンガポールでのインタビューは毎回、同じ時間、同じ場所で行われた。午後3時、官邸（イスタナ）にある首相執務室においてである。官邸は市街地にありながら、緑に包まれゴルフのハーフコースもあるほど広大な敷地の中にあった。首相執務室は意外にも質素な作りで、部屋には執務机と、その近くに応接セットが置かれているだけである。リーとは90度の角度で座り、彼との間には小さな孔子像が置かれていた。

初めてのインタビューでは極度に緊張したことをよく覚えている。まず質問状を送り、回答を文書で受け取り、それを読み、理解したという前提で、実際に会って質疑応答を重ねるという段取りである。回答は官僚がまず作成し、それにリーが赤字を入れるということであった。記者の英語がつたないとリーが席を蹴って出て行ってしまうと聞かされていたので、何度も質問を練習して臨んだものである。

◆メモ、資料、側近なしの真剣勝負

リーの声は低く大きく、部屋中に響くようであった。眼光は鋭く人を射るようである。このような威圧感は、記者としてのインタビューで今に至るまで感じたことはない。「どこからでもかかってこい」と言わんばかりである。手元にはメモも資料もなく、側近もいなかった。

シンガポールに赴任するまでに霞が関や永田町を取材した筆者にとって、これは驚きであった。日本では、首相や閣僚は記者会見等で、官僚があらかじめ用意した想定問答集に頼ることが多かったからである。

リーへのインタビューで毎回感じたのは、言葉の重みである。筆者は多くのインタビューをこなしたが、彼ほどの言葉の重みを感じたことはなかった。自分の言葉で語り、また話し方が確信に満ちているから、そう思わせるのであろう。

英国の植民地下で「英国紳士」となるべく育てられたリーが、コミュニケーションの重要性とその作法をたたき込まれたことは想像に難くない。もちろん本人の能力や資質は重要であるし、東洋のユダヤ人とも言われる客家（はっか）がルーツであることも影響しているであろう。リーの祖先は中国の北方から流れて、南洋にたどり着いた。闘争心旺盛で、サバイバル能力にたけた人も多かった。ちなみに鄧小平や李登輝も客家の流れをくむと言われている。

資源もない小国が生き残り、自国の発展を目指すには、誰が率いるかは極めて重要である。リーダーには国民を束ね、世界に対しては自国をアピールできる力量がなければなら

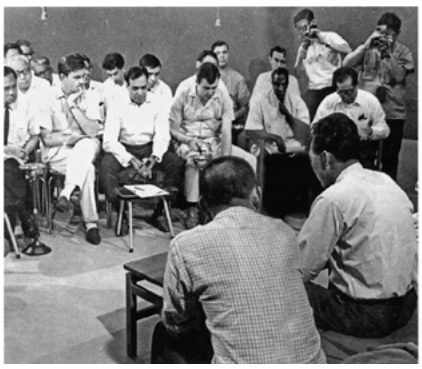
ない。そのための重要な手段が言葉によるコミュニケーションなのである。

リーへのインタビューには真剣勝負とも言える迫力があった。彼にとって一つひとつの言葉は武器であり、よくよく選んだうえで使わなければならない。

激動の時代を生き抜いた経験と自負もあったであろう。経験が言葉を通じて迫ってくるような気がしたものである。彼が「危機」と言うとき、それは国の存亡の危機であり、時に自らの生命の危険を意味していた。

リチャード・ニクソンは米大統領辞任後に出版した『わが生涯の戦い（In the Arena）』で、ダグラス・マッカーサー元帥の知識量や説得力に、政治家としての最高の評価を与え、「この点でマッカーサーに匹敵する人物はシンガポールのリー・クアンユーだけだった」と書いている。





独立直後の記者会見の様子と涙ぐむリー（1965年8月9日、『Lee Kuan Yew Hard Truths』から）

「危機感」を口にする内外の政治家は多いが、その表現が本物かどうかは、それまでの経験と、のちの行動をみればすぐ分かる。危機を語るなら、その理由を説得力のある表現で説明し、どう行動すべきかを具体的に語らなければならない。何より重要なのは、政治家としての実績を残すことである。

リーは59年に、当時英国の自治州であったシンガポールの首相となり、長く国を率い、奇跡とも言われる経済発展を成し遂げた。同国は豊かさを示す一人当たり国内総生産（GDP）で、すでに日本を大きく超えている。もちろん、この国の発展には地理的な条件や歴史、そして国民の資質や努力が欠かせなかったであろう。だが、指導者の持つ強い危機感と行動力、そして明確なビジョンがなければ、生き残りが難しいとされた国がここまで繁栄できたか疑わしい。

◆占領下で日本軍「報道部」勤務も

リーは数々の危機を乗り越えた。日本軍の侵攻と占領は若きリーにとっての最初の試練であった。筆者とのインタビュー（90年12月20日）では、日本軍兵士から収容所行きを命じられ、身の危険を感じて逃げたものの、その後の占領下で報道部という日本軍の情報機関に勤めたとも語っている。「ホードーブ」と言われ、一瞬戸惑ったが、すぐにそれが日本語であることに気が付いた。リーにとってこのころは、自分や家族がともかく生き延びることに精いっぱいであったろう。その後、指導者となってから最優先に考えたのは国としての生き残りである。余裕などない時代であった。建国後、かつて自らの命を奪いかねなかった日本から、むしろ積極的に学ぼうと国民に呼びかけたのも、国の生き残りのためである。

次の、そして国としての最大の危機は65年8月9日に訪れた。シンガポールの将来を考えたとき、マレーシア連邦への参加しか道がないと国民を説得し合流が実現したにもかかわらず、その後2年で事実上、脱退を余儀なくされてしまったのである。これは、小さな小舟が大海に放り出されるようなものであった。絶体絶命のピンチであり、国の存続すら危ぶまれたのである。

慶事であるはずのシンガポール独立は、リーにとって悲劇であった。その日の記者会見の様子は本欄掲載の写真から想像できるであろう。リーが涙を流したのは、この時と2010年にギョクチュー夫人を亡くした時の2回だけだったと言われている。

この独立の際の危機感がリーのその後の政治家人生の基盤となった。用心を怠れば、危機の可能性は現実になってしまう。

◆回顧録の監訳を担当

後年、日本経済新聞出版社からリーについての最後となる作品の監訳を依頼され、二つ返事で引き受けた。それは、若い記者たちによるインタビュー集で、聞き書きの「回顧録」とでも呼べる内容である。リーの思いと記者たちの緊張が伝わってくるようなやり取りであった。本書の出版は14年である。リーはシンガポールについて「沼地に立った80階建てのビル」と表現した。だからこそ安全保障の確保が最優先であり、国防相は「首相を除けば、閣僚の中で最強で、もっとも有能」でなければならないと述べたのである。リーの発言には、そうした認識をこれからの世代が共有しなければ国の将来は危ういとの危機感と、それを伝えたいという気迫がこもっていた。

このインタビューは09年のことで、86歳のリーは計32時間にわたり質問に答え続けた。彼が世を去る5年ほど前のことであった。

会　員　異　動　（2020年4月～2021年3月）

会員種別／月	プレス会員							法人・個人賛助会員		特別賛助会員	学生会員	全会員			
												合計		対前月増減	
	法人（社）	基本（人）	個人A（人）	個人B（人）	個人C（人）	個人D（人）	名誉・功労（人）	（社）	（人）	（人）	（人）	（社）	（人）	（社）	（人）
2020.4	131	736	278	56	63	823	11	57	125	106	61	188	2259	－1	－45
5	131	731	274	54	64	822	11	56	122	105	61	187	2244	－1	－15
6	131	725	270	54	62	819	11	56	122	105	61	187	2229	0	－15
7	131	726	263	54	59	814	11	56	122	105	61	187	2215	0	－14
8	131	728	264	60	62	817	11	56	122	104	70	187	2238	0	23
9	131	728	265	61	62	816	11	55	121	104	70	186	2238	－1	0
10	131	728	265	61	63	814	11	55	121	103	70	186	2236	0	－2
11	131	729	264	60	64	811	11	55	121	103	70	186	2233	0	－3
12	131	729	264	60	64	809	11	55	121	104	70	186	2232	0	－1
2021.1	130	726	262	59	64	808	11	55	120	103	70	185	2223	－1	－9
2	130	726	260	59	63	803	11	55	120	101	70	185	2213	0	－10
3	130	726	259	59	63	801	11	55	120	102	70	185	2211	0	－2

■会議報告

●第97回総会（2020年度臨時社員総会）

（3・26　10階ホール）

書面議決社員を含め出席社員計118社の出席をもって成立（定足数66社）、定款第25条の定めに従い原田亮介理事長を議長に議事を進めた。

2021年度事業計画および収支予算の理事会案を議決した（詳細は2ページ参照、予算書は17ページ参照）。昨年5月の定時社員総会以降届け出のあった役員の一部交代を承認した。

●第1133回総務委員会

（3・5　10階Cホール）

2021年度事業計画・同予算案を作成したほか、日本記者クラブ事務局長の任免（4月1日付）および第25期役員選出委員会を総務委員会委員で構成することを理事会に上程した。

出席　小松委員長、西村、乾、喜聞、西野、竹内、粕谷、宮川、小林の各委員、原田理事長、井原、小池の両副理事長、土生専務理事。

●第661回理事会

（3・5　10階Aホール）

①2021年度事業計画、同収支予算を総務委員会の原案通り承認、臨時社員総会に上程することにした。予算案は正味財産増減計算書予算で経常収益は3億2981万3千円、経常費用が3億8724万5850円で、コロナ禍の影響により貸室などの事業収益が大幅に減少し、当期一般正味財産が5743万2850円減少の赤字予算である。

②原田理事長から提案のあった事務局長任免を了承した。4月1日から事務局長に朝日新聞社の江木慎吾記事審査室長を迎える。

③総務委員会委員で第25期役員選出委員会を構成することとした。

④第97回臨時社員総会を3月26日に、第98回定時社員総会を5月24日に開催することを決定した。

また3月26日に予定されている毎日新聞社の理事交代にともない、小松浩理事が務める総務委員長を後任の理事に委嘱することを承認した。

出席　原田理事長、井原、小池の両副理事長、土生専務理事、西村、小松、乾、皆川、小林（巧）、高橋、喜聞、飛田、加藤、都留、竹内、粕谷、宮川、小林（毅）、野口、西野、富田の各理事、赤穂、岡部の両監事。

●第662回理事会（書面）

第17代理事長を務めた伊藤芳明氏（毎日新聞）を名誉会員に推薦することを決定した。

●2021年度日本記者クラブ賞・特別賞推薦委員会

（3・11　会見場）

加藤千洋氏を委員長に互選した後、1月末までに推薦のあった候補について意見を付して、選考委員会（4月8日開催）に報告することにした。

出席　加藤委員長、今井、内城、北村、実、鈴木、町田の各委員。

●第421回会報委員会

（3・10　大会議室）

3月で退任する渡辺昌己委員（民放連）のあいさつの後、4月号の編集について協議した。

出席　乾委員長、齊藤、曽我部、桑田、高橋、中村、神田、渡辺、迫田、長竹、西井の各委員。

●第523回会員資格委員会（書面）

4月1日付入退会を審議し、理事会に答申した。

●第515回企画委員会

（3・16　オンライン）

3月で退任する村山知博委員（朝日新聞）、磯崎由美委員（毎日新聞）のあいさつの後、今後のゲスト候補などについて協議した。事務局から総会記念講演（5・24）の講師に台湾のオードリー・タン・デジタル担当相（オンライン登壇）が決定したことを報告した。

出席　西村委員長、坪井、村山、磯崎、橋本、猪熊、藤井（彰）、佐々木、森田、杉田、中村、斉川、宮内、伊藤、出川、川戸、小栗、名村、平井、内城の各委員。

●第239回施設運営委員会

（3・19　会見場）

2020年10月以降の貸室利用などについて事務局が報告した後、緊急事態宣言解除後のクラブ施設の運営について討議した。3月で退任する平松剛委員（フジテレビ）があいさつした。

出席　皆川委員長、細羽、佐々木、平松、鈴木、林、有木の各委員。

2021年度　正味財産増減予算書（内訳表）

2021年4月1日から2022年3月31日まで

（単位：円）

科目	公益目的事業会計					収益事業等会計	法人会計	合計
	公1 記者会見等	公2 クラブ賞	公3 会報・HP	共通	小計			
1．経常増減の部								
⑴経常収益								
特定資産運用益				458,800	458,800			458,800
受取会費				235,049,256	235,049,256		66,295,944	301,345,200
プレス会員会費収入				199,077,840	199,077,840		56,150,160	255,228,000
賛助会員会費収入				35,971,416	35,971,416		10,145,784	46,117,200
事業収益						27,911,000		27,911,000
貸室料収入						20,273,000		20,273,000
飲食売上割戻し						3,859,000		3,859,000
施設機器賃借料						3,779,000		3,779,000
雑収益						97,000	1,000	98,000
受取利息							1,000	1,000
その他の雑収入						97,000		97,000
経常収益計				235,508,056	235,508,056	28,008,000	66,296,944	329,813,000
⑵経常費用								
事業費	162,847,260	11,371,110	45,836,230	58,556,930	278,611,530	48,246,480		326,858,010
借室維持費	75,364,600			56,652,250	132,016,850	24,949,800		156,966,650
借室料	39,156,000			24,472,500	63,628,500	19,578,000		83,206,500
共益費	6,973,600			4,358,500	11,332,100	3,486,800		14,818,900
空調・光熱費	3,770,000			2,356,250	6,126,250	1,885,000		8,011,250
ホール専用利用費	25,465,000			25,465,000	50,930,000			50,930,000
人件費	67,833,000	8,564,000	23,847,000		100,244,000	18,591,000		118,835,000
役員報酬	6,375,000	1,275,000	5,100,000		12,750,000			12,750,000
給与金	41,203,000	4,433,000	12,077,000		57,713,000	11,227,000		68,940,000
賞与・諸手当	19,684,000	2,787,000	6,486,000		28,957,000	7,226,000		36,183,000
厚生費	571,000	69,000	184,000		824,000	138,000		962,000
事業費	19,649,660	2,807,110	21,989,230		44,446,000			44,446,000
会議費	2,113,800	81,300	514,900		2,710,000			2,710,000
事業運営費	1,563,880	601,380	3,808,740		20,046,000			20,046,000
会報発行・ＨＰ運営費			16,337,000		16,337,000			16,337,000
クラブ賞実施費		1,800,000			1,800,000			1,800,000
運営雑費	343,980	13,230	83,790		441,000			441,000
通信費	1,413,200	282,640	1,130,560		2,826,400			2,826,400
印刷費	102,800	20,560	82,240		205,600			205,600
交通費	40,000	8,000	32,000		80,000			80,000
減価償却費				1,904,680	1,904,680	4,705,680		6,610,360
管理費							60,387,840	60,387,840
借室維持費							18,712,350	18,712,350
借室料							14,683,500	14,683,500
共益費							2,615,100	2,615,100
空調・光熱費							1,413,750	1,413,750
人件費							18,484,000	18,484,000
役員報酬							2,250,000	2,250,000
給与金							9,918,000	9,918,000
賞与・諸手当							6,183,000	6,183,000
厚生費							133,000	133,000
その他の管理費							18,597,850	18,597,850
クラブ管理費							13,648,850	13,648,850
機器備品費							200,000	200,000
消耗品費							761,000	761,000
事務委託費							2,229,000	2,229,000
事務雑費							981,000	981,000
通信費							706,600	706,600
印刷費							51,400	51,400
交通費							20,000	20,000
減価償却費							4,593,640	4,593,640
予備費							0	0
経常費用計	162,847,260	11,371,110	45,836,230	58,556,930	278,611,530	48,246,480	60,387,840	387,245,850
評価損益等調整前当期経常増減額	△162,847,260	△11,371,110	△45,836,230	176,951,126	△43,103,474	△20,238,480	5,909,104	△57,432,850
当期経常増減額	△162,847,260	△11,371,110	△45,836,230	176,951,126	△43,103,474	△20,238,480	5,909,104	△57,432,850
2．経常外増減の部								
⑴経常外収益								
経常外収益計								
⑵経常外費用								
経常外費用計								
当期経常外増減額								
当期一般正味財産増減額	△162,847,260	△11,371,110	△45,836,230	176,951,126	△43,103,474	△20,238,480	5,909,104	△57,432,850

重要になる科学記者の役割



岡部　信彦
川崎市健康安全研究所所長
第11回／3月26日／ネット51人

■「コロナだけでなく全体見て」

政府の新型コロナウイルス感染症対策分科会に所属する岡部氏が、広い視野とバランスを意識した解説で本ゼミを締めくくった。

インターネットに溢れる過度に悲観的、楽観的な新型コロナの今後の見通しをけん制。致死率の高さを警戒しながらも、コロナ以外の感染症の流行や自殺者の増加に目配せして「コロナ一点にとらわれず全体を見る必要がある」と述べた。

私権制限を伴う緊急事態宣言に慎重な姿勢で知られる岡部氏は、冷静な目をメディアにも向ける。記事に登場する専門家が本当に深く知っていることを話しているのかを問い、「科学的に淡々と」というスタンスかどうかを重視すべきと説く。

ドキッとした。エッジの効いた言説でPVを稼ごうとしていないか―。そう諭された気がした。

毎日新聞社くらし医療部　原田　啓之

■科学担当対象記者ゼミを終えて

8期目を迎える2020年度の「記者ゼミ」は「科学記者の役割」と題し、11回、10人の講師を招いた。年間の企画案を考え始めたのは昨年1月末。当初は科学分野の主要テーマを3つに大別し、体系的に取材課題を整理できるよう構想した。

ところが昨年2月以降、世界も日本もコロナ禍に見舞われた。このため当初方針を変え、各回とも記者たちの当面の取材課題に照らした「今日的」内容にした。結果として新型コロナ感染症関係が4回。初回も最終回も日本の感染症対策の第一人者である岡部信彦氏にお願いした。

この間、気候変動・海洋プラスチックといった環境、ゲノム編集、「東日本大震災から10年」を機に地震・津波など、それぞれの研究分野で日本を代表する研究者を招いた。

残念ながらオンライン形式が多くなったが、参加記者と講師との間で率直な意見交換もできた。講義内容は多くの記事に反映された。日々取材に追われている多忙な各社の現場記者たちにとって少なからず役に立てたのではないかと思っている。

特別企画委員　内城　喜貴

伊藤芳明さん　名誉会員に



日本記者クラブの理事長を務めた伊藤芳明さん（毎日新聞）がクラブの名誉会員となった。3月の書面理事会で決まった。伊藤さんは2014年5月から17年5月まで、第17代の理事長を務め、信頼たる「情報発信基地」としてのクラブの機能強化に尽力した。

「コロナ禍のオンライン会見で、海外からの会見が可能になるなど多くの利点を感じた。同時に、面と向かって二の矢三の矢の質問を放ち、本音に迫るリアルな会見の貴重さを、改めて痛感させられた。事実発掘の場としての機能に一層期待したい」と伊藤さんからクラブへ励ましの言葉をいただいた。

名誉会員は定款で「特に功労のあったもので、理事会で推薦された個人」と規定されている。歴代理事長が出身社の顧問などになった際に、理事会が推薦を決定する。

元理事長の名誉会員は中江利忠さん（朝日新聞）、杉田亮毅さん（日本経済新聞）、北村正任さん（毎日新聞）、滝鼻卓雄さん（読売新聞）、斎藤史郎さん（日本経済新聞）がいる。

土曜記者ゼミ

調査報道編⑨　3・13／ネット53人

第1部　高田昌幸　東京都市大学メディア情報学部教授

■「権力監視、端緒情報がすべて」

高田氏は元北海道新聞「道警裏金問題事件」取材班代表。「調査報道の〝ど真ん中〟である権力監視は、端緒がすべて」と言い切った。記者クラブでの定点観測、元職への接触など端緒をつかむ手法を紹介。「お上品になりすぎていないか」「だまされないために圧倒的な知識を」など強烈な言葉が心に刺さる。自身が立ち上げた調査報道グループ「フロントラインプレス」の概要も説明した。

第2部　高田氏らアドバイザリーチーム

■リモートで地方記者参加が可能に

参加者からの質問にチームメンバーが各自の考えを披露し、議論した。

20年度はコロナ禍ですべてリモート方式の開催。不自由な点もあったが〝禍い転じ〟て福にも。受講が難しかった地方在住記者が数多く受講できたこと、講師の承諾を得たコマを期間限定で動画公開したことなどだ。新年度もプログラムや開催方法を工夫して継続開催する。

土曜記者ゼミコーディネーター　毎日新聞出身　橋場　義之

「写真回廊」の短文を担当します

今月号から２年間、下記の４会員が「写真回廊」の短文を担当します。新聞・通信各社の写真部記者の「この１枚」に、自由な発想でエッセーを添えていただきます。



○熱田（あつた）　充克（みつよし）

毎日新聞を経て1985年フジテレビ入社。パリ特派員、外信部長、国際局長などを経て2015年退職。「薬害Ｃ型肝炎」報道で02年に新聞協会賞、米ピーボディ賞、03年民放連賞最優秀など受賞。著書に『パリの漆職人 菅原精造』。



○迫田（さこた）　朋子（ともこ）

1980年NHK入局。アナウンサーとして「ニュースワイド」や「おはようジャーナル」を担当、NHKスペシャル「人体～脳と心～」の制作、解説委員、制作局エグゼクティブディレクターを経て2016年定年退職。現在、ビデオニュース・ドットコム。



○萩谷（はぎたに）　順（じゅん）

1971年朝日新聞入社。政治部、カイロ、ウィーン、ボン各特派員、外報部次長、編集委員を経て2005年退社。19年まで法政大学教授。現在、同大名誉教授。テレビ朝日「ニュースステーション」コメンテーターなども担当。



○横田（よこた）　弘幸（ひろゆき）

1974年読売新聞入社。社会部、地方部などの後、事業局部長、局次長。読売日本交響楽団理事長などを経て2014年退社。現在、日本オペラ振興会評議員。日本の酒文化、歴史をテーマに執筆。著書に『ほろ酔いばなし　酒の日本文化史』など。

会報委員から

東京勤務となって1年。気楽な単身赴任だが、コロナ禍とあって外食はなるべく控え、朝晩、自炊をしている。

調理の際は栄養バランスや塩分にも気を配っているつもりだが、いかんせん腕前がよくない。凝った料理は作れず、見た目も度外視。炒め物や鍋物が多い1年だった。

春になり、人前に出せる料理も覚えようと、書店に立ち寄った。目に留まったのが、市瀬悦子著『切り口ひとつで美味しく見せる　驚きの魅せレシピ』だ。

肉巻きやフライ、卵焼き、押しずしなど、包丁で切って断面の彩りを楽しむ料理を紹介している。中に挟んだ野菜の色や形、組み合わせが、切った時の「魅せ」ポイントらしい。

この本にひかれたのは、ほかでもないタイトルの「切り口」という言葉だ。職業柄だろうか。

会報委員会の席でもよく、切り口が論議になる。

翌月号の「ワーキングプレス」「新列島」などのテーマを選ぶ際、どういった観点の執筆をお願いするか。例えば新型コロナウイルスの感染拡大のように、事象が刻々と変化するものは、焦点の当て方によって執筆の依頼先も変わる。政治的な切り口か、それとも社会的な切り口か。

委員にもそれぞれの考え方があって議論は毎回勉強になる。さらに掲載された原稿は現場記者の視点や取材の裏話も加わり、読み応えのあるものになっている。丁寧な仕事のたまものだろう。

料理は肉巻きに挑戦してみた。刻んだニンジンやキャベツを薄い豚バラ肉で巻く。簡単に思えたが、肝心の輪切りの際に断面がぐしゃっと崩れてしまった。野菜の刻みを手抜きしたせいか…。

同書には「ひとつアドバイスするとしたら、『丁寧に作る』という気持ちを忘れない」とある。

魅せる切り口は簡単ではない。

高知新聞社東京支社編集部長

高橋　誠

魅せる「切り口」とは

新しい個人Ｄ会員

西川（にしかわ）　靖志（やすし）



1981年日本経済新聞入社。大阪本社経済部次長、東京本社運動部長、マーケティング本部副本部長、日経CNBC取締役経済解説委員長などを経て、現在、テレビ愛知常勤監査役。

「花粉症です。うつりません」の猫バッジを付けながらも、ゲホゲホして、周囲の目を気にする今日この頃です。物事を多角的に見て真実を追求するよう、勉強させていただきます。

マイ BOOK マイ PR

■『響きをみがく　音響設計家 豊田泰久の仕事』

石合　力（朝日新聞社大阪本社編集局長補佐）

究極の響きはいかにして生まれるのか



朝日新聞出版
1,870円

特派員稼業と演奏会通いの両立を目指してきた筆者が出会った謎の男トヨタ。サントリーホールやパリ、ハンブルクなど世界の主要ホールの音響設計を手がけ、関係者の間では、自動車でなく彼を指すほどの存在だ。残響時間が同じホール内で席によって響きが違うのはなぜか。音響は「天気予報のようなもの」（バレンボイム）なのか。指揮者ラトル、ゲルギエフ、建築家ゲーリーらに謎を尋ね、「究極の響き」をみがく過程を描く。

■『心の歌よ！　日本人の「故郷」を求めて』

伊藤　千尋（朝日新聞出身）

21の歌の現場と作者を取材



新日本出版社
1,760円

日本人は世界でも稀な「歌う国民」だ。魂を揺さぶる歌にはそれなりの背景がある。「赤とんぼ」や「北国の春」など21の歌の現場や作者を取材し、歌の成り立ちを探求した。

「神田川」は最後の１行で主語が女性から男性に替わる。「故郷」の「かの山」は目の前にそびえる具体的な山だった。「幸せなら手をたたこう」の作者とともに、歌が生まれて54年後のフィリピンを訪れた。

愛唱される歌を追求することで、日本人の心情がうかがえる。私たちは何者か、が歌から見えてくる。

■『震災復興10年の総点検　「創造的復興」に向けて』

加藤　裕則共著（朝日新聞社元石巻支局員）

東日本大震災復興政策を検証



岩波ブックレット
726円

東日本大震災の復興政策を正面から検証した。政府は公共事業を中心に32兆円という巨額予算を投じたが、どこまで被災者の幸せにつながったのか。特に巨大な防潮堤は各地で紛争となった。震災当時の民主党政権が掲げた「創造的復興」とは何だったのか。当時の官房参与、現地で３年半取材した記者、建築家の３人が改めて現地に出向き、漁師や農家、商工会議所、高台・内陸の移転者らから話を聞きながら丹念に各事業を評価した。

■『プロデュースされた〈被爆者〉たち　表象空間におけるヒロシマ・ナガサキ』　柴田　優呼（朝日新聞出身）

日米で被爆者の扱いが違う理由



岩波書店
4,840円

新聞社を去り海外に出て、英語の渦の中に飛び込むと、そこには全く違う被爆者像があった。北米ではなぜ、被爆者の声を取り上げない映画が、ヒロシマの映画とされるのだろうか。日本の原爆映画はなぜ、北米で受け入れられないのだろうか。ジャーナリスティックな視点に基づき、学術的な手法で、日米双方で「プロデュース」されてきた被爆者像に迫った。2018年に刊行した英語の学術書を、日本語読者向けに大幅に加筆した「アカデミック・ジャーナリズム」の書。

■『愚かな風　忖度時代の政権とメディア』

山田　健太（専修大学教授）

言論表現の自由を巡る動きを追って



田畑書店
2,530円

この15年に何が起きたか――政府批判を偏向視し、対立を煽り、社会を分断する。対話や討議は避けられ、不都合は隠蔽される…。その結果、ジャーナリズムは衰弱し、表現の自由の危機は一層深まった。前著『見張塔からずっと』から続く、琉球新報と東京新聞に連載した約４年分のクロニクルに、戦後から今日までの年表「言論表現の自由を巡る動き」を収めた。それら「過去」が映し出すのは、まさに「いま」の日本社会そのものである。

◇

この欄へ掲載ご希望のかたは下記の担当までお問い合わせください。
事務局：杉本翔一　電話：03-3503-2729
メール：sugimoto@jnpc.or.jp

日本ジャーナリスト懇話会３月例会

今日的テーマで講師のお話を聞く日本ジャーナリスト懇話会の３月例会は19日（金）に開催された。講師は滝鼻卓雄さん（ジャーナリスト、元読売新聞東京本社社長、会長）、演題は「新聞記者のつとめ」。滝鼻さんは社会部記者、論説委員、社会部長などを歴任したジャーナリストとしての昨今の取材への期待と思いを語った。「取材力の低下」「組織ジャーナリズムの限界」「取材は記者の行動範囲でどこまで突き詰めるか」「自分の中に検察官はいないか」など鋭い発言も。「緊急事態宣言の記者会見、質疑時間で、記者は国民が知りたいことをもっと突っ込んで聞かないのか。新聞はしっかりしてほしい」と述べた。（幹事　竹内實昭）

レストラン＊価格は全て税込みです

予約電話　和食 3503-2723　洋食 3503-2766・2731

和食　卯月懐石（4/30まで）

前菜：春野菜真砂和え、わかさぎ南蛮　お椀：桜花大根、蟹、粟麸など　造り：鮪、桜鯛、甘海老　焼物：鰆桜花焼き　煮物：海老芋煮寄せ、穴子など　揚物：ふぐ唐揚げ、青唐など　食事：鰻肝雑炊　水菓子：桜餅（5,500円）　（板長：内海圭史）

洋食　季節のおすすめコース（4/30まで）

生ハムとグリーンアスパラガスのサラダ仕立て、春野菜のミネストローネスープ、鰆のポワレ　紅芯大根のヴィネガーソース、フルーツメルバ、コーヒーまたは紅茶、パンまたはライス（4,400円）。ランチ、ディナー（土曜日はランチのみ９階レストラン）ともにご利用いただけます。（シェフ：佐藤和治）

９階和食レストランにもアクリル板設置

新型コロナ感染防止策として、９階和食レストランの対面式の席にアクリル板を設置しました。会員の皆さまに安心してお食事をお楽しみいただけるよう今後も対策を継続します。

リアル形式の試写会、再開しました



緊急事態宣言中はオンライン配信での試写会を行ってきましたが、宣言解除を受け約５カ月ぶりに、会場でご覧いただく形式の試写会を再開しました。ただし定員制で事前申し込みが必要です。

再開後初の試写会「標的」（写真　３月30日開催）は満員御礼。「大きなスクリーンで見れてうれしい」との声がありました。

会員登録変更のお届けを

異動の季節です。会員の入退会には所定の「変更届」を事務局へお届けください。役職変更のみの場合もお知らせください。

いずれも事務局の村田（電話03-3503-2727 murata@jnpc.or.jp）まで。

■訃報　有泉一雪会員（フジテレビ出身、84歳）が３月27日に死去されました。ご冥福をお祈りいたします。

HP更新情報　https://www.jnpc.or.jp/

■会見詳録　会見の文字記録

- 「2021年経済見通し」⑦雇用・賃金の展望
  山田久　日本総合研究所副理事長（2021.2.3）
- 著者と語る『知事の真贋』
  片山善博　早稲田大学大学院教授（2021.2.16）

クラブ施設利用時間、通常通りに

緊急事態宣言の解除を受けラウンジ、レストラン、貸室利用がほぼ通常営業に戻りました。土曜日の開室も再開しました。

【ラウンジ】

午前10時～午後９時（土曜日は午後６時まで）＊入室は１組４人まで

【９階和食レストラン】

午前11時30分～午後２時30分　夜の部の営業を再開しました。午後５時～午後９時 土曜日はランチのみ。（ラストオーダー 昼は午後２時、夜は午後８時）

【10階アラスカ】

午前11時30分～午後３時、午後５時～午後９時（ラストオーダー　昼は午後２時、夜は午後８時）

【貸室利用】

平日：午前10時～午後９時、土曜：午前10時～午後５時（９階）、午前10時～午後４時30分（10階）

部屋ごとにご利用人数を制限しています。詳細はフロアマネジャーまでお問い合わせください（電話03-3503-2724）。

■記者会見

加盟社所属記者、会員が会見場に出席する従来の会見を再開しました。ただし定員制（10階大ホール40人、９階会見場20人、先着順）です。会見のZoomによるライブ配信は継続して行います。全ての会見は事前申し込みが必要です。申し込み時に、参加形式を「会場」か「ウェブ」どちらかを選択してください。

＜法人代表変更＞

QUICK　高見信三　代表取締役社長
（旧 近藤勝義氏）
日本海テレビジョン放送　田口晃也　代表取締役社長
（旧 真鍋和彦氏）

クラブネクタイ、新色登場



日本記者クラブのロゴ入りネクタイに新色が仲間入りしました。無地で明るい紺色です。受付横のガラスケースで展示、販売しています。価格は１本7,337円（税込み）です。

今後の行事予定（4/5現在）

28㈬	17：00 ～ 18：00　10階ホール 「アジア経済見通し2021年版」報告書会見 澤田康幸・アジア開発銀行（ADB）チーフエコノミスト

クラブの電話　ダイヤルイン

- 和食レストラン（9階）……☎3503-2723
- 洋食レストラン（10階）……☎3503-2766
- 貸室予約、宴会打ち合わせ…☎3503-2724
- 受　付……☎3503-2721
- 会員事務……☎3503-2727
- 経　理……☎3503-2728
- クラブ行事への申し込み…☎3503-2722
- 会員申し込みアドレス…kaiken@jnpc.or.jp

会員現況

●法人会員：129社　●基本会員：721人　●個人会員：1,168人
●法人・個人賛助会員：55社・121人　●特別賛助会員：99人
●名誉・功労会員：12人　●学生会員：33人　計：184社・2,154人

会報委員会

委員長＝乾　正人
委　員＝神田　俊英　桑田　広久　齊藤　信宏　迫田　朋子　曽我部　桂　高橋　誠　中村　直樹　長竹　孝夫　西井　泰之　渡辺　昌己
（事務局：本庄五月　杉本翔一）

☎03-3503-2754　FAX 03-3503-7271

写真回廊

撮影：澤田　将人（東京新聞写真部）



東京電力福島第一原発事故から10年を前に、国会前で脱原発集会が行われた。参加者は東日本大震災の犠牲者へ黙とうをささげた＝3月7日（キヤノン１ＤＸマークⅢ、16-35㍉レンズ、1/800秒、F8、ISO1600）

なにもしゃべらない

騒がしい都会の一角から、すっと音が消えた。
だれも、なにもしゃべらない。
そうして10年前の地震と津波の犠牲者を悼む。
その静けさを広角でとらえた。撮った澤田さんは「聞こえていたのは私たちのシャッター音だけでした」。
3年前、我が家に子犬を迎え入れた。山口県の公園で、野犬の母親から生まれてすぐに捕獲され、殺処分3日前に地元の保護団体がレスキューした。私が里親になった。
毎朝、この犬と海辺を散歩している。
大きくて立派な犬を連れている人と出会った。
「この子、福島から来たんですよ」
うちの犬とはあまり折り合いがよくなかった。会津と長州は長年の宿敵だから、と冗談を言い合った。
あの日、大地が激しく揺れた。そのあと飼い主がいなくなった。犬を見捨てたわけではないだろう。原発に近い町だったから、断腸の思いで別れたにちがいない。
ボランティアの人たちが路上でこの犬を見つけて保護した。もとの飼い主とは再会できずに里親探し。故郷から遠く離れた町で新しい飼い主と出会った。
山野をさまよっていた間にどのくらいの放射線を浴びたのか。わかるはずもない。
「最近、腹水がたまっちゃって」
憂い顔の飼い主。原因はわからない。
私はしゃがんで犬の頭をなでた。
がんばったな。長生きするんだぞ。
犬はなにもしゃべらない。
あれから10年がたった。なにもしゃべらないからといって、あの日を忘れたわけでは決してない。

（熱田　充克）